

---

# ～ 誓い ～

巖櫻 祿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

〜誓い〜

### 【Nコード】

N5504D

### 【作者名】

巖 櫻 禄

### 【あらすじ】

魔法使いレファと日雇い剣士ルーツ、ハンスのドタバタ冒険コメディ。秘宝『カマラ』を取りに行く3人。そして壮絶なドラゴンとの戦い。ちよっとラブコメなファンタジー。

冒険者の街、ガルディア。

大通りから一本入った路地にある酒場から怒鳴り声が聞こえてくる。

「ばっかやろう！これだから困るぜ、お嬢様はよ！」

「なによ！何にも解ってないくせに！」

「ちょ、ちよつと・・・2人ともさ、ね、ケンカやめようよお。」

この手の酒場で日常的に行われているような言い争い。

もちろんそれが刃傷沙汰になる場合もあったりする・・・

周りにいる客は全く聞こえないかのようなそぶり。

店の店員もしかり・・・

「ね、ルーツの言いたいことも解るけどさ、今はレファに雇われているんだからレファの言うこと聞かなくっちゃ。」

大きな斧を腰に下げている大男がその風貌に似合わないほどおろししながら隣に座っている男を説得している。

「あんだ、こら、ハンス？貴様どっちの味方なんだ？」

「そ、そ、そんなぁ・・・どっちって・・・」

ハンスと呼ばれたその大男はルーツとレファの両方の顔を見ながら困っていた。

「あなたも男ならはつきりしなさいよ！もう！」

「ご、ごめんよお。そんなに怒らないでくれよ。ね、レファ。」

「大体ねえ、あなた達それでも用心棒？ただのお使いじゃないんだ

から！」

レファと呼ばれた女性・・・おそらく魔法使いだろう。衣装が職業を物語っている。

その、レファは腰に手を当て仁王立ちになりながら腰まである金髪を振り乱して激怒していた。

「お使いたあ、ずいぶんじゃねえか？こっちは契約分のお仕事はちゃ〜んとこなしてるぜ？」

と、ルーツも切り返す。

腰に細身ではあるが明らかに手入れのされている剣を差し、メタル系の鈍く光った防具を身につけている。

ブロンドの髪に切れ長の目。

顔は整っているがその口から発せられる言葉はお世辞にも綺麗とは言い難い。

「大体俺達に買い物頼むか、普通？それで買ってくるモンが違うとか言うんじゃないよ。お門違いも良いとこだ。」

「なによ！ただただ毎日ぼ〜っとしててお金取っていくならそれくらいのことはいしなさいよね！」

「んだあ？じゃあ、もつとまともな仕事させるよ！冒険に行くでもねえのに用心棒なんて雇うんじゃないやねえ！」

「だからちよつと待ってていつてるでしょ？あと1日2日待てないの？このせつかち！」

「だったらお手伝いのおばさんでも雇うんだな！そんなとこまで面倒見てらんねえや！」

「・・・く〜・・・」

「こっちはプロなんだぜ？プロは戦いの中に身を置いてなきゃ錆び付いちゃうんだ。」

「・・・わ、わかったわよ。じゃあ、明日の朝出発しましょ。それなら文句無いでしょ？」

「ああ、ぜんっぜん構わねえ。そっちの準備が整ってりゃな。」

「あ、あ、明日なのね・・・」

「んだよ、デカイ図体のくせしていざ出陣となったら意気地ねえなあおまえは。」

「だ、だって、イムカリ山行くんでしょあ・・・」

「あなたも用心棒なんだから！しっかり私を守ってよね！」

「おまえ、そこのお嬢様に守っていただいた方が良いんじゃないかあ？」

「イヤよ！こんなの・・・」

「こ、こんなのって・・・そんなあ・・・。」

まあ、いつもの出来事である。

・・・  
・・・  
・・・

その夜、レファの家の屋根裏部屋・・・

「大体あのお嬢は口の利き方をしらねえ。たまらんぜ、あんなのに雇われてちゃ。」

「で、でもさ、ほら、最初ルーツも言ってたじゃない。ああいうかわいい雇い主も良いかって。」

「見た目と中身は別ってこった。あんなのなら願い下げだ。」

「・・・ね、明日・・・」

「あん？」

「明日、イムカリ山だよね。」

「ああ、なんだビビってんのか？」

「だって、ほら、何だっけ、何とかってやつ。すぐく上の方にある

んでしょ？」

「ああ、秘宝『カマラ』。山の中腹にある洞窟の奥の方だ。大丈夫だって、お前はいつものようにしてりゃいいんだから。」

「だめだよ。考えただけで膝がガクガク震えちゃうモン・・・」

「けっ、言ってる。」

・・・

まだ夜も明けきらない早朝。

朝靄の中の草原を歩いていく3人。

「何かあっても絶対私は守ってよね。」

先頭を歩いていたレファが後ろ向きに歩きながら2人に念を押す。

「ああ、守つたる。安心しろ。」

鞘に収まった長身の剣を無造作に肩に担ぎ、自らの腕の重さを剣に委ねたままルーツが答える。

「そんなに安心できるわけ無いじゃない。」

「あ、ね、レファ。ルーツは一度やるって言ったらやる人だよ。大丈夫。」

ルーツの後ろを歩いていたハンスがルーツの頭越しにレファに答える。

「ホントに守ってよ！」

「ああ、俺の剣に誓っても守ってやるさ。」







「かわいい奴がいつぱい。」

「つな訳ないでしょ。いくよ、もお。」

洞窟にはいると湿った臭いと足下のぬるつとした感覚だけ。自分の手も見えないほどの暗闇。

「うわあ。」

「ね、ランプ出して。」

「んあ？そんなモンもってねえよ。」

「えええ〜。あんたたち、何しにきたのよ。」

「わっわっ！」

「どうしたあっ！」

シャキンツ　と剣を抜く音。

「蜘蛛の巣が顔にくつついたよあ〜。」

「…つつたく。死ぬまでやってろ。」

「ねね、ちよつと、どこにもいかないでよあ。」

「で、この真っ暗な中でどうする？」

「ちよつとまつて。今魔法で明るくするから。」

「おう、そうしてくれ。つつ〜か、そんな事できるなら『ランプ』とか言うんじゃないよ。」

「うるさいわねえ。いざつて時のために魔力を残しておきたいの！」  
「へいへい、どこでもいいからさっさと明るくしてくれ。」

「…Light Fleame！」

・・・何も起きない。

「あれ？呪文間違えたかな？」

「おいおい。」

「Lightning Fleame!」

・・・

「Lightning Flame!」

その瞬間、洞窟の天井が白く光り始める。

「おお、ありがてえ。」

だんだんと光が一点に集まり明るさを増してくる。

レファは勝ち誇ったように仁王立ちになる。

「どう？これだって魔法学校の卒業試験じゃ13番目の成績だったのよ！。あなた達と違って…」

と言ってルーツを指さした瞬間、天井がピカツと光り、激しい轟音とともに稲妻がルーツに向かって落ちる。

辺りはまた暗闇へと戻っていった。

唯一ルーツの頭の上に残るかな放電と焦げるような臭い。

「てめえ、思いつきり呪文間違えただろう？」

「…ごめんなさい…」

・・・

「で？『洞窟を明るくする呪文』は解ったのかい？魔法使いの優等生サンよ。」

洞窟の表に一度出て、煤だらけの顔を拭くルーツ。

「うん、もう大丈夫。」

「ったく、アンタの魔力が大したことなかったのと、オレが訓練積んでたおかげでこれだけで済んだけど。」

何も言えずに落ち込むレファ。

手には魔法教本。

その視線の先にはこう記されていた。

~~~~~  
Lightning Flame（難易度：高）

かなり強力な雷属性の攻撃魔法。

熟練術者であれば攻撃対象、攻撃力を任意に制御することもできるかなり有用性の高い魔法。

ただし、低熟練の術者が使うと攻撃力のばらつきが大きく、ネズミ程度も排除できない程度から中型モンスターを確殺できるほどの攻撃力までばらつく。

~~~~~

運が悪ければルーツを帰らぬ人にしてしまったことに反省していた。

・  
・  
・

洞窟内に入る3人。

レファが深呼吸をして呪文を唱える。

「Light Faint!」

洞窟全体の壁がほのかに明るくなっていく。

「…ふう…」

「さて。じゃ、いきますか。」

ルーツ、レファ、ハンスの順番で歩き始める。

レファが地図を見ながら道案内をしひたひたと薄明るい洞窟を歩いていく。

「えっと、ここから40歩先を左に曲がると…っ！」

いきなり口を押さえられるレファ。

あわててその手を引きはがし、手の主であるルーツに猛抗議。

「ちょっと！いきなり何するのよ！」

言いかけて見上げたルーツの顔は今まで見たこともないような引き締まった顔だった。

切れ長の目に『静かに！』を意味する口に添えられた長くまつすくな指。

レファは自分の胸の鼓動が高まるのはルーツのせいじゃないと自分に言い聞かせた。

「ハンス、お姫様を頼んだぜ。」

何か言おうと訳の解らないジェスチャーをするハンス。

どこからとも聞こえてくる足音。

はっ、と地図を見るレファ。

「コツチにいけば遠回りだけど道が続いてる。」

「じゃ、じゃあ、ぼくたちはそっちに…」

いそいそとレファの背中を押して脇道に逃げるハンス。

ジグザグにできるだけ追っ手から逃げるように奥へと逃げるハンスとレファ。

しばらく進むと横穴にある小さな部屋のようなところにでた。

「ここに隠れてよう。」

背中を押されて中にはいるとペタンと座り込むレファ。

「…ルーツ、大丈夫かな？」

「大丈夫。そんなにヤワじゃないよ。」

「そっか…」

話すことがなく、ただじつと聞き耳を立てている2人。  
水のしたたり落ちる音だけが響いている…

しばらくじつとしているとどこからともなく聞こえてくる足音。  
ヒタヒタヒタツ、という素足で歩いているような音。

「…何か…いる？」

「わ、わかんないよあ〜。」

「ちょ、ちよっと。どうするのよ。」

「どうしよ…」

その瞬間、入り口からのぞく緑色のとがった鼻としわしわの顔。

目は血走り、口はだらしなく開いている。  
ゴブリンだ。

「何か出た…」

「ハ、ハンス！ やっつけて！」

「え、ぼく？」

そんなやりとりをしていると入り口から鈍い音。

ズシュ…

何事かと入り口にいるソレをみると…

喉から剣の先が出ており、目は完全に白目をむいていた。  
その後からルーツの声。

「オトリになってくれてありがとうとよ。」

「ルーツ！」

「おう、無事だったか。」

「よかった無事だったんだ。」

「アンタに心配されるほどひ弱じゃねえ。」

「ね？ ルーツは大丈夫だっていったでしょ？」

「なによ！ 何もしてくれなかったくせに！」

一気に肩の力が抜けて涙があふれてくる。

「バカッ！ どうして私を… もう、置いてかないでよ？」

「守るためだ、あきらめろ。」

「そんな、だって、もう、こんな。」

入り口に立って地図を見ているハンス。  
ルーツは剣を鞘にしまつとレファの後ろに立つ。

「大丈夫だ。アンタは強ええ。また何か出たらサツキの魔法をぶち込んでやれ。」

「だめだよだつて…あれは…」

「あ？あんなのオレには効かねえけど、ココのヤツじゃイチコロだぜ？」

「だめだよ、私の魔力じゃ…弱いし…」

そのとき、ハンスが声をかける。

「ルーツ。お宝はこの先にいけばありそうだよ。」

「そうか。じゃ、戴きに行ってくるか。」

「待って、置いていかないで。」

「アンタはここで待つてろ。」

「いやっ！一緒にいて！あんなのがまた出てきたら…」

「大丈夫。この辺りをウロウロしてたのは片付けた。最初に出くわしたオーガは逃がしちゃったけどな。」

ルーツは腰の剣を抜くとレファと自分の間にその細身で鈍く光る刃をかざした。

「この剣に誓ってもお前を守るって言つたら。そして、あれを取ってくる。それが誓いだ。」

「そんな・・・そんなの信じられないよ。」

「俺は女には嘘を吐くが、自分の剣には嘘は吐かねえ。」

口元でにやりと不敵な笑いを浮かべてハンスとルーツは出ていった。

「そんな・・・そんなの・・・そんなの信じられないよつ。」

レファは一人で居る寂しさに負けそうになりながら、涙をこらえて  
ルーツ達の無事を祈っていた。

~~~~~  
~~~~~

レファをかくまっている横穴からしばらく戻った横穴の入り口から  
ルーツが中をうかがっていた。

「ったく、『カマラ』ってのが秘石だって言われるのが良くわかる  
ぜ。」

ハンスが通路の方を警戒しながらルーツに話しかける。

「巢にいるのは…子供？。親はいるの？」

振り返らずにルーツが答える。

「ああ、横にべったりだ。」

「しばらくは『待ち』だね。」

「そういつこつた。」

しばらく二人はそのまま身を潜めながら中にいる「親」の動向を観  
察していた。

「ちょ！ちよつと！だめだよ！」

突然ハンスが声を殺しながら通路の奥に向かって手を振り始めた。



その通路の奥には形相を変えながら走ってくるレファがいた。

「そんなに騒いだら気づかれちゃうよ！」

「たっ、助けて！」

「ええ？」

レファの後ろを見るとよだれを垂らしながら獲物を仕留めようと殺気立っているオーガが追ってきていた。  
とっさにルーツが剣を抜きながら振り向く。

「くっそお、付いてねえや。あんにゃろ、回り道してレファん所行つたな。」

息も絶え絶えに走ってきたレファを後ろに匿いながらルーツとハンスが立ちはだかる。

前を見るとオーガは不気味な目を見開き、大口を開け、両手を広げていた。

身長は明らかにルーツの倍。

つまりハンスの1.5倍。

オーガはこちらの隙をうかがうように2等身離れて四つん這いになった。

その目は明らかに血走っており殺気立っていた。

「グウウウウ・・・」

オーガが低く唸った。

その瞬間、別の方向から低いうなり声とかすかな地響き。

「ちっ、大将のお出ました。」

ルーツが後ろを見て舌打ちを打った。

素早く後ろに回り構えるルーツ。

レファを挟んで2人が背中を合わせていた。

「ハンス、そいつを一撃で仕留めてくれ。」

レファが不思議そうな顔でルーツとハンスを見る。

あんなに頼りなく、弱そうではつきりしなかったハンスに、あのオ  
ーガを仕留めろ、だなんて。

しかも一撃で・・・

不思議に思いながらハンスの顔を見て驚いた。

今まで見たことのない、明らかに自信に満ちた顔。

味方にいてくれてホントに良かった、言い方を変えれば決して敵に  
回したくない。

そんな顔をしていた。

そして、ルーツが構えたその先、先ほど2人が中をうかがっていた  
穴から大きな陰が出てきた・・・

「う・・・そ・・・」

レファがうわずった声を上げた。

「嘘じゃねえ。あんたが欲しがってた『カマラ』ってのはこいつの  
腹ン中にある石の事だ。あんたが大騒ぎしたおかげで気づかれちま  
った。」

「そ、そんな・・・」

穴から出てきた巨大な陰。

冒険の経験が少なく、実物を見た事のないレファでも知っている姿。

それは紛れもなくドラゴン。

この大陸で生存が確認されているモンスターの中でもっとも巨大で頂点に君臨する王者。

「ハンス、そっちをさっさと片づけてくれ。」

「任せな。」

今まで聞いたことのないハンスの声だった。  
びしっと芯の通ったバリトン。

いつものふぬけなハンスの声ではなかった。

腰に下げている斧にすっと手が伸びた・・・

と思った瞬間、それは回転しながらオーガの頭上まで飛んでいた。  
フツと息を吐くと同時にその巨漢に似つかわしくない素早さでジャンプし斧をキャッチ。

「ドウオリヤア！」

ハンスの怒号が響いた瞬間、宙を舞っていた斧はオーガの頭をかち割り、鮮やかな緑色の体液が辺りに飛び散る。

断末魔を上げる間もなく動かぬ個体と化したオーガから斧を抜き、向き直るハンス。

自分の子供を奪われると本能が察したドラゴンはうつすらと開けた口の間から黒光りした牙を覗かせながらこちらを威嚇していた。

「ルーツ、逃げようよ。」

「こいつから逃げられるかよ？みんなで仲良くおやつになってお終いさ。」

「でも、あんなの・・・」

「殺らなきゃ殺られる。だったら殺るだけさ。」

「だめだよ。みんな死んじゃう！」

「大丈夫。ルーツは一度やるって言ったらやる人だ。」

ルーツの隣で斧を片手に仁王立ちになっているハンスが顔を向けずに話しかける。

「それじゃ、最高の舞台を特等席で見せてやらあ。ビビって腰抜かすなよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ドラゴンとの戦いは壮絶な戦いとなった。一進一退の激戦。

お互いにそれぞれ深手の傷を負いながらも決してひるんでいない。

ルーツは額から派手に血を流し、目に入る血を剣を持った手で拭いながら二の腕を左手で支えていた。

ハンスは片足をかばいながら斧を片手に持ち、ふらつく体をもう片方の手で支えていた。

対するドラゴンは片目からは光を失い、片手は地面を向いたまま動こうとしていなかった。

この場で唯一無傷なのはレファ。

あまりの壮絶な戦いに息をするのも忘れて立ちすくんでいた。

「さて、そろそろクライマックスと行きますか。」

ルーツが気を取り直すように剣を構え直す。

ハンスもそれまでかばっていた足が何事もなかったかのように体制を整える。

それを見たドラゴンも低いうなり声を上げながらゆっくりとこちら

に向き直る。

「もう、もういいよ、ルーツ。もうやめようよ……」

泣きそうな声でレファが後ろから訴える。

「へっ、ここで止めるわけにやいかねえだろ。何せ話の通じる相手じゃねえ。」

「でも、これ以上やったら……」

「どっちかがくたばるまで終わらねえ。もう止められねえよ。」

「ここまで来たら殺るしか無いよ。さ、危ないから後ろに……」

「ハンス、お嬢様と一緒に下がってる。さっきの横穴まで。」

「……ハンス……まさか……あれ、使うのかい？」

「へっ、ここで使わねえで何処で使うよ。ドラゴン殺ったとなりやあ、孫の代まで自慢できるぜ。」

「……解った……」

「なに？何やるの？ダメだよ！」

「さあ、レファ。さっきの穴まで引き返そう。ここはルーツに任せ……」

「ルーツ！」

「大丈夫だ。俺のことなら心配すんな。孫の代まで自慢したくてもまだ子供もいねえんだ。絶対帰るさ。」

「ね、ちよつとまって！」

レファが腰袋からうつすらと緑色に光る玉を取り出す。  
それを天にかざすと共に短く、はつきりと唱えた。

「B l e s s i n g   f r o m   H e a v e n !」

とたんに辺り一面が緑色の光に包まれる。

一瞬にして視界が緑から解放される。  
すると、ルーツやハンスの体中の傷が癒され、体の芯が暖まってい  
くのが解った。

「ありがとう。」

「そういや、あんた、魔法使いだったな。」

「がんばって！」

「ああ、まかせな。」

うつすらと目に涙を溜め、ハンスに連れられてレファが奥へと退散  
した。

「さて、これであんたとタイマン張れるぜ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ハンスと先程の横穴まで退却。

ハンスは入り口の近くの壁に寄りかかりながら、目をつぶって腕を  
組んでいる。

レファはハンスに背を向け奥の方で座り込んでいる。

ただ、ルーツの無事だけを祈って。

「・・・・ットにあんた達って馬鹿なんだから・・・・。こんな事に命  
張る事無いのに・・・・」

「・・・・ルーツはこういう人だよ。やると言ったら絶対やるんだ。  
何があってもね・・・・」

「・・・・馬鹿・・・・」

22

これ以上聞いても役に立つ答えは返ってこない。  
とにかく自分の目で確かめるほか無い。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ルーツとドラゴンが居たであろう辺り。

何か焦げているようなにおいが辺り一面に漂っている。

「ルーツ、何処に行っちゃったんだろう？」

心配そうに辺りを見回すレファ。

「たぶんこつちだよ。」

ハンスはドラゴンの出てきた穴を指さした。

ハンスと2人でその穴の入り口に入ったとたん、ルーツの姿があった。

地面に仰向けになり、全身が煤で真っ黒くなり、あちこちに傷を負っていた。

「ルーツ！」

「大丈夫？」

「・・・・・・ん・・・・あ・・・・ああ、何とか生きてら。」

「良かった、心配したんだよ！もう！」

当たり散らすかのようにルーツの肩を拳で叩きながら、レファの目からは涙があふれそうになっていた。

「おいおい、泣くなよ。だいじょうぶだって。」



「・・・バカッ！」

ルーツが立ち上がるとレファが抱きついてきた。とにかくなんだか解らないが、ルーツが無事に生きていたことが何より嬉しかった。

「おいっ！ちよつと待て！」

ルーツが抱きついてきたレファを押しつける。腰に付けた革袋の中に手を入れ、中をまさぐる。

「お、無事だったか。」

そう言つて袋から出したのは、琥珀色の玉。

卵より少し大きめで、その中心からは不思議な光が漏れていた。

「あ・・・カマラ・・・」

「お約束の品だぜ。」

煤で汚れた顔で不適な笑いを浮かべながら目の前にかざす。

「ありがとう！」

受け取ろうと手を伸ばしたレファ。

とっさに袋にしまうルーツ。

「まだダメだ。帰ったら渡してやる。成功報酬と引き替えた。」

「えゝ、チヨットくらい見せてよ。」

「今見せたたる。さあ、帰るぞ。」

「ケチ！」

「ケチで結構！」

「ドケチ！」

「ああ、俺はドケチだ。ドケチで大いに結構！」

「っんもっん……」

[illegible]

「はい、約束の報酬。」

「それじゃ、これ。」

ルーツが腰袋から「カマラ」を取り出す。  
机の上の金貨の山の横に並べた。

「ね、一つ聞いてもイイ？」

「何だ？くだんねえ事聞いたら承知しねえぞ？」

「最後にドラゴンをやったときのすごい音。あれ、何？」

「あん、あれか？サンダーボールって知らねえか？」

「え、うん。知ってるよ。」

「そう、あれだ。」

「つて、あなた、サンダーボール持ってたの?！」

レファの顔が驚きの表情に変わり見る見る疑惑の表情に変わる。

「ちよつと……それつて……」

「ああ、持ってた。」

「も、持っていたって……あんた達ねえ……あれを手に入れるのに人がどれほど苦労したと思ってるのよ!」

「何だよ。どうせ持っていくつもりだったんだらう？」

「ちがう！ あれはあれで大切なの！ バカ！」

「バカとは何だ！あれを俺が持つていつてなきや今頃みんなで仲良く仏さんだぜ?!」

「サンダーボール使っちゃってどうするのよ！返しなさいよ！」

「そりゃ無理だわ。ありゃ使ったら無くなっちまう。」

「解ってるわよ！だから・・・だから・・・こおの、バカモノオ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

レファが「カマラ」を手に入れてから3回目の収穫祭が終わった翌日。

下町にある酒場の一角。

「あんだと、この分からず屋！」

「分からず屋はそっちでしょ！イイ？よく考えなさいよ。」

「よく考えても一緒だ。サンダーボール取りにそんな所まで行つてたら2ヶ月はかかるぜ？」

「元はと言えば誰のせいだと思ってるのよ！」

「あんたがあんなモン取りに行くなんて言い出さなきや良かっただけの話だろうが。」

「ちよ、ちよっと・・・2人ともさ、ね、ケンカやめようよお。」

酒場で未だに日常的に行われているような言い争い。

周りにいる客は全く聞こえないかのようなそぶり。

店の店員もしかり・・・

「ね、ルーツの言いたいことも解るけどさ、奥様の言うこと聞かなくっちゃ。」

「その、奥様つてのがすごく納得できねえ・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5504d/>

---

～ 誓い～

2011年1月4日04時09分発行